



特別賞 三省堂書店賞

内田樹著『邪悪なものの鎮め方』（バジリコ 2010）

（生田開架：914/258//S）

文学部3年 成田紗絵

この世界には、邪悪なものがたくさんある。邪悪なものは、いつ私たちに牙をむいて襲いかかってくるのか分からない。それでも私たちは邪悪なものに侵されないようにこの世界を生き抜かなければならない。本書はタイトル通り、『邪悪なものの鎮め方』をそっと囁いてくれるものである。しかし本書の囁きを理解できるか、又実行できるかは私たちに委ねられている。

そもそも「邪悪なもの」とは何だろう。内田樹氏は「邪悪なもの」を「どうしていいかわからないけれど、何かしないとたいへんなことになるような状況」と定義している。マニュアルも正解もない。それでも正しいことを選ばなければいけない。そのような局面が、人生には何度も訪れる。私たちが生き残るためには、邪悪なものとの遭遇した時それでも適切にふるまえるような知性が必要なのだ。

内田樹氏は、過激派学生であった頃に「邪悪なもの」と遭遇した。それは暴力である。ただの暴力であるならば、それは「邪悪」ではない。当時過激派学生が出会ってしまった暴力とは「どういう基準でその選択がなされたのか分からない」暴力である。どうして彼は死に、自分は生き残ってしまったのか。それについて説明することができない事実は人々を深く傷つける。私たち現代の大学生は、「過激派の時代」を知らず、遠い歴史上の話だと思っている。しかしいつでも誰でも、「どういう基準でその選択がなされたのか分からない」暴力にさらされる可能性がある。それは例えば、事故かもしれない。通り魔的犯罪かもしれないし、災害かもしれない。自身が「邪悪なもの」によって損なわれるかもしれないし、大切な人が奪われるかもしれない。私たちの世界は、本当は想像以上に謎に満ちている。何だか分からないものがたくさんある。「邪悪なもの」に対峙するとき、最低限それだけは心に留めておきたいし、本当に「邪悪なもの」を鎮めたいと思うのならぜひ本書を読んでほしい。

私は内田樹氏の文章を読む度に、真っ当な大人になろうと決意する。今の日本には被害者イズムがはこびっている。以前に比べると精神的な「子ども」が増えすぎたせいであるようだ。

「もう少し『大人』のパーセンテージを増やさないと『システム』が保たない」と内田樹氏は語る。私は大人になりたい。「これは私の責任です」といって粛々と自らの責務を果たすような大人になりたい。そして数多の大学生も本書を始めとする内田樹氏の著作を読んで「大人」を目指してくれることを祈っている。